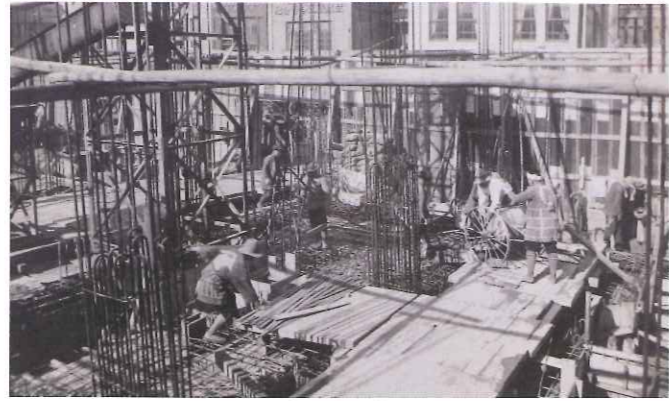


コンクリート打ちの様子



配筋工事の様子

玄関を入った1階エントランスは、石膏彫刻を装飾された天井、イタリヤ産大理石の壁面、モザイクタイル

「竣工当時は南側の龍閑川に面して設置されていた」（高木氏） そうだが、川の埋め立てとともに北側玄関に移設された。いまでは同社のシンボルマークに獅子が使われている。

現在、1階玄関の両脇におかれている2つの獅子像。また、正面玄関入口部分のアーチや柱の頭部に施されている多数の動植物のレリーフには播州産の赤龍石が使用されている。これらのレリーフが建物の芸術性を高めていることは言うまでもない。

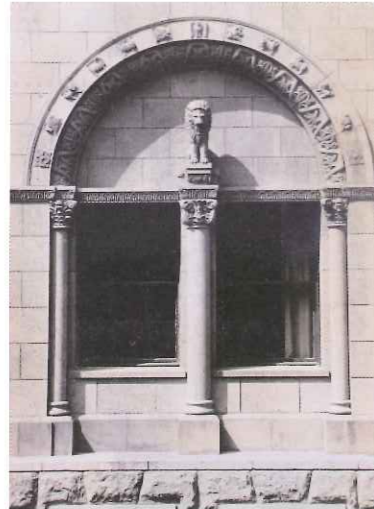
まで総掘りを行い、基礎工事において長さ15m・12m・9mの生松杭を打ち込んだ。また、時間をかけながら配筋工事とコンクリートの詰め込みを行っていた。

ビルの外観や内装にもこだわりの技術や部材が採用されている。

1階部分の外壁には主に播州産の黄龍石が使われているほか、2階以上の外壁は昭和初期に流行したスクラッチタイルで覆われている。また、正面玄関入口部分のアーチや柱の頭部に施されている多数の動植物のレリーフには播州産の赤龍石が使用されている。



竣工時の1階エントランス



竣工時南側1階アーチ部の獅子像

高木氏は小さい頃を振り返り、「建物は太平洋戦争の戦禍を免れたが、当時祖父が焼きだされた被災者を地下に住ませたところ、被災者が煮炊きをした煙で1階の天井の彫刻が煤で真っ黒になってしまった。白く塗ってしまつて竣工

ルを組み合わせた床が来館者を迎える。このほか、内部階段に設置された飾り窓、現在でも使用している各階のシューターから投函された郵便物を集める私設郵便函などを目にする事ができる。



車のショールームスペース

### 1階が自動車のショールーム

昭和6年に竣工した旧太洋ビルディングは、2階以上をテナントビルとして使用したが、1階は太洋商会の子会社がゼネラルモー

工当時の色が再現できないのは残念。また戦時中、館内に飾られていたグリルなどの真鍮の装飾品は供出せざるを得ず、現在は木製で複製している」などと語る。

## オフィスビル・アーカイブ

# 旧太洋ビルディング(現・丸石ビルディング)

本誌ではこれまで話題の新築ビルを誌面で取り上げてまいりましたが、長きにわたって地域のランドマークとして活躍している既存ビルにもスポットを当て、新コーナー『オフィスビル・アーカイブ』において紹介していくことにいたしました。

第1弾として取り上げるのは、昭和6年(1931年)から神田・日本橋エリアに建つ「旧太洋ビルディング(現・丸石ビルディング)」。東京協会会員の太洋商会が所有するビルで、貴重な写真とともに、同社社長の高木康夫氏の話を変えながら同ビルを紹介していきます。

### 震災に強いビル目指し、昭和6年竣工

JR神田駅から中央通りを三越方面へ4分ほど歩くと左側にレトロ感の漂う建物が現れる。

近世ロマネスク様式の外観が特徴の「旧太洋ビルディング」(現・丸石ビルディング)だ。「この建物を見るのは初めて」と思う読者はいるだろう。しかし、知らず知らずのうちに目にしていく方は多い。特に多くの女性の方々だ。実は横浜の赤レンガ倉庫と並んで、同ビルはファッション雑誌の撮影に使われることが多く、流行のファッションを身にまとったモデルさんの背景に同ビルのファザードが写っている誌面が多々あるという。

同ビルは旧館と新館をつなげて現在の仕様となっているのだが、旧館の竣工は昭和6年(1931年)3月、新館は同8年(1933年)9月で、築後80年を超える建物である。概要はSRC造地下1階地上6階建て、建築面積555.37㎡、延床面積4095.82㎡の規模。天井高が1階4.55m、2階以上3.16mとゆつたりとした空間を提



昭和6年に竣工した旧館

供している。

設計は(株)山下設計の創業者、山下壽郎氏。旧太洋ビルディングは同氏が独立して設立した山下壽郎建築事務所の手掛けた第1号物件で、同社ホームページでも紹介されている。施工は竹中工務店が担当した。

太洋商会社長の高木康夫氏の祖父で、創業者の山口佐助氏が関東大震災の経験と教訓を活かし「震災に強い建物を」という強い願いから、当時の技術を結集して建てたものだ。

### 当時の技術を結集

昭和4年(1929年)6月に旧館の設計が完了し、翌月に着工した。

当時、同ビルの南側には龍閑川が流れていた。この川に対する防護と構造的な配慮から、地下6m



松杭打ちの状況



地鎮祭の様子



竣工当時のオフィス室内



竣工当時の正面玄関

ターの代理店をやっていた関係からシボレーのショールームを開設した。

オフィスビルの1階をショー

ルームとして使用する。今では当たり前のように目にする光景だが、まさか戦前から、しかも昭和初期からそうした使い方がされていたと知っていた人は少ないのではないだろうか。

### 機能更新のための点検・改修工事の実施

竣工から80年余。同ビルは現在、満室稼働している。

高木氏によると、「これまで機能更新のための大きな工事を数回行っている」という。昭和59年（1984年）に外壁面の補修工事を行ったほか、築後60年にあたる平成3年（1991年）にはコンクリート強度検査や内部鉄筋の錆確認などを含めたビルの外装全般にわたる点検・補修工事、平成6年（1994年）にビル全体の窓サッシの取り替え等の改修工事、そして平成18年（2006年）から19年（2007年）にかけて耐震補強工事を実施した。このほか、竣工当初の重油焚きボイラーで暖房を送る空調設備を全室エアコンの個別空調へ切り替え、光ケーブルの引き込み工事、OA化に対応した床上げ工事によるフリーアクセスフロアへの更新などオフィス

ビルとしての機能向上のための様々な取組みを行っている。

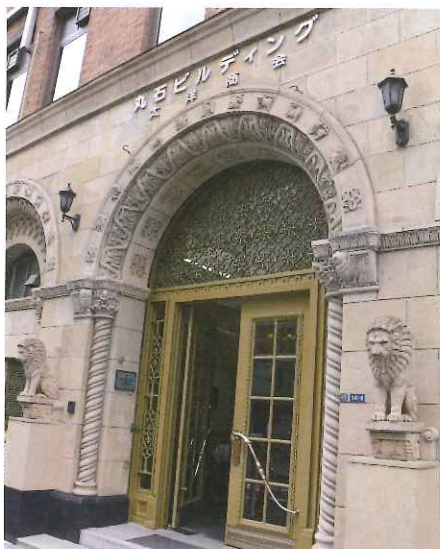
コンクリート強度検査では「コア抜きのカッターの刃が壊れるほどの強度を有していた」（高木氏）という。昭和初期の丁寧な建設工事をうかがわせるエピソードである。

平成18年〜19年の耐震補強工事は、当初の建設を担った山下設計と竹中工務店のもとで行われたが、「建築物の耐震改修の促進に関する法律」のAランクの評価を取得している。

### 良好な資産を次世代に引き継ぐ

同ビルは、平成12年（2000年）に（社）建築設備維持保全推進協会（現、公益社団法人ロングライフビル推進協会）より第9回BELCA賞のロングライフ部門賞を受賞したのに続き、平成14年（2002年）には国の登録有形文化財に指定されている。

高木氏は「歴史的建造



様々な装飾が施され、獅子像が飾られた玄関



現在の丸石ビルディング

物の保存・再生を規定した『文化財保護法』を念頭に置き、良好な社会資産として次世代に引き継いでいくことが私たちに課せられた役目」と強調する。

こうしたトップの強い信念のもと、同ビルは来年にも竣工以来の大規模な改修工事に着手することになっている。